



K.UNO NEWS LETTER

Vol.26

ケイウノは全国に店舗展開するジュエリーのオーダーメイドブランドです。
この広報通信では、毎月1回、ケイ・ウノのジュエリーやオーダーメイドに関する
さまざまなヒト・コト・モノの情報をお届けします。



お客様の熱いご要望に対して
同じ熱量で応える職人でいたいと思っています

今月、ケイ・ウノでは江戸時代から続く
伝統的な金属技法「木目金(もくめがね)」
を用いた2種類のブライダルリングを発
売します(4月には追加で2種類)。木目
金はもともと刀の鑢(つば)などに使われ
ていた技術。種類の異なる金属の板を幾
重にも折り重ねることによって生まれる柄は

シンプル&スタイリッシュ。他に類を見ない
独自の輝きを放ちます。

今回は、木目金に取り組んで10年余。ケ
イ・ウノの木目金加工技術の中心的役割
である有田クラフトマンに、その魅力をと
ことん語っていただきました。



有田 暁 製造部 宝飾課

2004年入社。ケイ・ウノの「オーダーメイドで妥協の無い商品を作る」という志に深く共感し入社。心齋橋店の工房でクラフトマンとして腕を磨き、2011年から関東勤務。

社長の言葉に感銘を受け ケイ・ウノ1本に絞った就職活動

— ケイ・ウノに入社されたきっかけは。

有田「もともと絵を描いたり、何かを作ったりすることが好きで、得意でした。ただ、美大ではなく普通の大学に進んだこともあって、しばらくものづくりから離れていました。

でも、就職活動をしているうちに、いろいろなきっかけがあつてケイ・ウノの存在を知りました。名古屋で開催された会社説明会に行つたんですが、その時の社長の話に感銘を受けました。

— どんなどころに感銘を受けたのでしょうか。

有田「それまで、自分がほしいと思うものを売っていないことが多くて、何かもやもやした感覚をずっと持っていたんです。結局既製品だと完全に満足することはできないのかな、と思ったりしていました。

ところが、社長が話された「オーダーメイド」というキーワードを聞いた途端に、そのもやもやがすっきりと晴れたんです。自分が求め

ていたものはこれだったんだと。お客様が納得されるころまで徹底的に作り込むという話を聞いて、そんな会社が本当にあるんだと思い感動しました。その時点で、エントリーしていた会社を全部キャンセルして、ケイ・ウノ一本に絞りました。

— そして入社されました。その後。

有田：関西エリアの第一号店である心斎橋店に配属されました。店内に工房があつてジュエリー作りの工程を覗いていただくこともできる店舗です。そこで6年間に過ごした後7年目に上京して今に至ります。



木目金の魅力を雄弁に語る有田さん



ケイ・ウノの商品を生み出す職人の加工機。さまざまな道具が並ぶ

ひたすら手作業でつくる木目金

— では改めて「木目金」について基礎的なところから教えていただけますでしょうか。

有田：木目金は江戸時代から伝わる伝統的な技法で、もともとは刀の鐔などに使われていたものです。複数の種類の地金を組み合わせ何枚も重ね、熱し、叩き、削って金属の色の違いを利用して木目状の模様を表現します。

木目金を製造する技法は、極端な話、江戸時代から大きく変化してはいないかもしれません。製作するのは、ひたすら手を使います。とにかく、ひたすら叩く、伸ばす、やすりをかける。現在の最新技術が一切通用しない伝統的な技法といえると思います。

— 複数の種類の地金を使うところが特徴なのですね。

有田：そうですね。ただ、伝統工芸の木目金は赤銅とか純金、純銀など指でも曲がるほど、柔らかい地金を使います。木目金は叩いたりねじったりして柄を出していくので、それに適した地金を使うわけです。

でもケイ・ウノの木目金は、ピンクゴールドなど堅い素材を使います。本来ならば用いないような地金を使った上で、先人と同じような柄出しができるかどうか、そこに難しさが



木目金の試作品。ここからブラッシュアップして完成に近づけていく

あります。剥離したり曲がらなかつたり、悩まされながらの毎日です。

— なかなか手強そうです。

有田：でも、そこがまたいいんです。金属の性質と直接向き合うという意味で、非常に魅力を感じます。一生懸命向き合っているのに、なかなか思うようにならない。あともう少しで完成という時に、突然ヒビが入ったりするんです。

「なんでここで割れんねん！」って結局全部やり直すことになるんですが、だからこそ、克服したいという思いもあります。最近、ようやく満足いく柄が出せるというところにたどり着き始めています。

ものづくりを行う職人にとって製作過程自体が本当に楽しい。木目金という伝統的な技法を近代的な技術に落とし込んだ時、先人が編み出した技術にどこまで近づくことができるのか、飽くなき挑戦です。

木目金との出会い。 研究開発チームの立ち上げ



2009年に発売した「MOKUME」

— 有田さんが木目金と出会ったのは、いつだったのですか。

有田：私が心齋橋店にいた時です。2008年に社長の肝いりで、木目金の商品に取り組むことになり、当時の先輩がまず技術を習得、その方を中心に木目金の製品をスタートしました。

その先輩が私の隣の席だったので、あれこれやっているのを見てもう興味津々。自分にもやらせてもらえませんかと頼んだのが始まりです。それ以来、木目金の技術の伝承と研究、製作を担当しています。今ではチーム体制ができ、今回の新作開発に至りました。

— 2009年に、木目金の指輪を発売されていますね。

有田：はい。2009年3月ですから、ちょうど10年前ですね。木目金の技法を用いた2種類の指輪を出しました。

2017年からは、店舗の職人が中心に企画を進めて木目金の指輪・手作り体験サービスも開始しています。

あらかじめ棒状に加工した木目金をローラーで薄く伸ばし、専用の機械を使ってリング状に曲げた後、バーナーで溶接。最後にやすりなどで研磨し、形を整えます。すべての工程を職人が手ほどきし、最終仕上げも行うので安心してDIYしていただけます。結婚指輪をDIYされる方もたくさんいらっしゃいます。



店舗併設の工房で行われる木目金DIYの様子

ライトな感覚で捉えるケイ・ウノの木目金



3/15発売の「MOKUME Arietta Fianco」。柔らかなラインが特徴



シンプルなフォルムが印象的な「MOKUME Piantina」

— 最後に今回の新作について教えてください。

有田：今回は4月に追加発売されるものも含めて4種類のデザインを発表します。

伝統的な木目金の技法を極めながら、地金の組み合わせなど新しいことに挑戦しています。プラチナとシルバーというシンプルな組み合わせの「白樺2色」や、これまで使っていなかったイエローゴールドを取り入れた「いちちょう」。他にも「白樺2色」

にホワイトゴールドを加えた「白樺3色」、ピンクゴールドを用いた「朱桜」の4種類からお選びいただけます。

また、木目金は薄い地金の積層のため、「彫り」加工が難しいとされていますが、今回は「鑿(たがね)」という彫刻刀のような刃物で地金に彫りを入れています。

木目金は、日本が誇る伝統的な技術ですが、その面だけを強調するの

ではなく、新しい種類の地金だと思ってもらいたいです。プラチナにするかゴールドにするか木目金にするかという、選択肢の一つとして捉えていただくといいと思います。

現代のライフスタイルに木目金を落とし込んだ場合、それくらいのライトな感覚で捉えていただいた方がいい。それがケイ・ウノの木目金だと思っています。

— 現代のライフスタイルに添った木目金。また新しい魅力が開花しそうですよね。

有田：木目金の粋な味わいを活かして、ジュエリーだけでなく、時計の文字盤などいろんなアイテムにも転用できると思います。最近のシンプル志向にもマッチしています。

私たち職人はいろいろなものを作りたい。でもお客様の要望がないと作ることができません。ですからお客様からのご要望はむしろ大歓迎。ぜひいろいろなご要望をいただければと思います。

— 木目金の魅力がよくわかりました。ありがとうございました。

3月の誕生石 「アクアマリン」

透き通った水色が美しいアクアマリンのルース(裸石)。かのマリー・アントワネットが愛したジュエリーとも言われています。暗い照明の下で一段と輝きを放つことから「夜の宝石の女王」の別名を持ち、夜会服のジュエリーとして用いられることも多いとか。

